

小笠原で暮らすイルカたち～識別しやすい仔イルカたち～

ミナミハンドウイルカの子どもは、生後3年頃までは母親と一緒にいることが多く、その後は母親との同伴がほとんど見られなくなります。母親と同伴している期間であれば、わかりやすい特徴がなくても成長を追うことができますが、親離れ前に識別ポイントを見つけることができないと、その後も継続して追うことが難しくなります。今回は、親離れ前の個体の中でも、すでにわかりやすい特徴がある個体をご紹介します。

#385(ビヘイブ)♂

観察歴：2021年～
観察海域：父



2021年生まれ。尾柄部(びへいぶ)にサメに噛まれたと思われる傷跡があるのが特徴。左目の後方にある黒い線傷も識別のポイントです。姉である2017年生まれの#342(ライン)も一緒に群れにいます。



傷跡が治ってきました



母

#19(スポッティー)♀

観察歴：2003年～
観察海域：父



姉

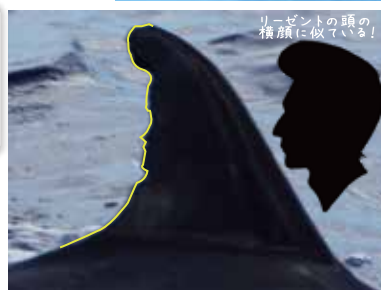
#342(ライン)♀

観察歴：2017年～
観察海域：父



#361(エルビス)不明

観察歴：2020年～
観察海域：聳・父



リーゼントの頭の横顔に似ている!

2020年6月以前に出生。大きく欠けた背ビレの形は、まるでリーゼントの横顔。船上からも識別しやすい個体です。母親の#298(サンダー)は、背ビレと尾ビレに特徴的な欠損があります。



母

#298(サンダー)♀

観察歴：2014年～
観察海域：聳・父



☆写真提供：☆打込みゆき